

6. 貴司山治におけるモラエスの影響

— 日本の文学者におけるモラエス受容 —

河田和子

1. はじめに

ヴェンセスラウ・デ・モラエス（1854年5月30日～1929年7月1日）は、日本研究家としてラフカディオ・ハーン（1850年6月27日～1904年9月26日）とともにその名が挙げられてきたが、日本の文学者はどのようにモラエスを捉えていたのだろうか。モラエスは、海軍士官から外交官に転身して明治32（1899）年神戸大阪ポルトガル領事の任を受け神戸に移住した。芸妓・福本ヨネと結婚したが先立たれ、愛妻の郷里・徳島に造った墓を見に行ったことが契機で日本永住を決めて領事の職を辞し、大正2（1913）年に徳島に隠棲した。母国ポルトガルでは著名な文筆家であり、ポルトガル領事の職に就く前から、『極東遊記』（Traços de Extremo Oriente. 1895年）、『大日本』（Dai-Nippon 1897年）などアジア、日本に関する著作を発表し、神戸・徳島移住後もその文筆活動は続けられた。

日本の文学者や文化人らがモラエスに注目するようになったのは没後、七回忌の頃からである。昭和10（1935）年にモラエスを偲ぶ催しとして徳島で法要と講演会、東京でも追悼会や座談会が盛大に催された。著作の翻訳もなされて、昭和10年には第一書房から花野富蔵の訳で『日本精神』（原著 Relance da Alma Japoneza. 1926年）、『徳島の盆踊』（原著 O"Bon-odori" em Tokushima. 1916年）が刊行された。詩人・小説家の佐藤春夫「徳島見聞記」（『東京朝日新聞』昭和10（1935）年7月1日～5日、初出「徳島見聞記 モラエス埋骨の地」）をはじめ、モラエスに言及した作品＝〈モラエスもの〉もこの頃から増えてくる。しかし、七回忌より前にモラエスに言及した文学者は少なく、それは本稿の終わりの【参考I】（日本の文学者における〈モラエスもの〉一覧 戦前：大正14年～昭和19年）に示したとおりである。なお、戦後の作品については調査中であり別の機会に提示したい。モラエスが昭和10年代に評価されるようになるのは、日本の文学者や哲学者ら文化人の間で〈日本的なもの〉の議論が高まったことと連動している²。

それまでモラエスに言及した日本の文学者が少なかったのは、原著がポルトガル語で書かれているため読むのが難しかったことも関係するが、今回注目したいのは、小説家の貴司山治がいち早く「文豪モラエス」（『暴露読本』改造社、昭和5（1930）年11月、初出稿「モラエスさん」大阪割烹学校機関誌『婦人之世紀』大正14（1925）年12月）を発表していたことである。鳴門出身の貴司は、大正14年夏にモラエスの住居を訪れており、その体験をもとに作品を書いたのだが、ポルトガル語が読めなただけにモラエスの著作を読んではない。モラエスに関する情報、知識も乏しかった中で貴司はどのようにモラエス

を捉えていたのか。本稿では、モラエスの文学的受容を見ていくにあたり、いち早くモラエスを作品の題材として取り上げた貴司山治に注目し、彼の文学においてモラエスとの出会いはどのように影響していたのかを見ていく。

2、モラエス紹介の新聞記事を発端として

貴司は昭和初年代、プロレタリア文学陣営の中でも大衆向けの小説を目指した作家である。その経歴やモラエスを訪ねた時の境遇について言及しておく必要もあるが、それは次節で述べるとして、まずモラエスに会おうとしたきっかけが一つの新聞記事にあったことに触れておきたい。前述したように、モラエスに対する関心が高まったのは七回忌の頃だが、それ以前にも存命中、モラエスのことが新聞で話題になったことがある。貴司の「文豪モラエス」冒頭でも、「東京日日新聞の文芸欄に「恋と盆踊りの徳島に隠れ住むポルトガルの文豪モラエスさん」といふ三段ぬきみだしの記事が載った」³（傍線は引用者）と書かれている。いつの記事なのかは作中に明記されていないが、今回の調査で『東京日日新聞』に掲載された最初のモラエス紹介記事と一致するものであることを確認した（傍線の前後部分は、実際の記事の見出しと異なる）。

徳島に住むモラエスのことが初めて日本の新聞で報じられたのは、大正末年の『東京日日新聞』であることは既に指摘されているが、実際いつの記事なのかは未詳だった⁴。今回毎日新聞社のオンラインデータベース「毎索（マイサク）」で『東京日日新聞』の紙面を逐一調査することにより、該当する記事として『東京日日新聞』大正 14（1925）年 3 月 9 日の朝刊に掲載された岡本良知「徳島に隠れ住む 文豪モラエス 日本娘の跡を慕ひ 栄職を抛つて十余年」を見つけ、詳細も確認することができた（【参考II】に全文を示したが、モラエスの写真も掲載）。執筆者の岡本良知（明治 33（1900）年 2 月 20 日～昭和 47（1972）年 8 月 6 日、富山出身）は、後に『南蛮屏風考』（昭森社、昭和 30（1955）年 1 月、亜細亜大学教授）などを書いた歴史学者だが、大正 11（1922 年）年に東京外国語学校（現・東京外国語大学）のポルトガル語部を卒業し、その三年後に書いたのがモラエスの紹介記事である。当時東京外国語学校には、ポルトガル人語学教師ジョアン・ダマラル・アブランスセス・ピントがおり、岡本もその教え子だが、ピントの指導を受けた学生の中には徳島に住むモラエスの住居を探して直接会いに行った者もいた⁵。

岡本の紹介記事を目にして、東京や他県で生活していた徳島出身者が帰省した際にモラエスの住まいを訪ねたケースも少なくない。『徳島毎日新聞』大正 14（1925）年 4 月 12 日、14 日掲載の藍谷長三・井口京「徳島に住むポルトガル文豪 ウエンセスラウ モラエス氏訪問記」には、早稲田大学の学生だった藍谷が、学友から『東京日日新聞』に載ったモラエスの紹介記事のことを教えてもらい（12 日記事、藍谷、紹介記事も一部引用）、徳島に帰省した折、友人の井口とともに同年 3 月 24 日にモラエスの住居を訪問したこと（14 日記事、井口）が記されている。訪問時の様子は書かれていないが、新聞記事に触発されてモラエスを訪ねる者がいたことの一例である。

貴司もまた、『東京日日新聞』の紹介記事に刺激を受けてモラエスに会いに行ったのだが、実際に訪れたのは四ヶ月後、大正 14 (1925) 年 7 月 29 日である。そのことは『貴司山治全日記』⁶で確認でき、同年「七月二十九日」の日記として次のように記されている。

早朝、モラエス訪問のため中川キクマロ君を帯同、徳島に至る、日盛りの市中町を歩く、渭山の暗鬱なる色のニュアンス、橋のかゝれる河、モラエスの家は伊賀町三丁目といふ田舎のやうな裏町にあり、モラエス七十二の老人也、二十一才の時海軍々人となりて世界中の殖民地をめぐり、日本に來りて五十年故国をみず、徳島に令終の体なり、ロイマチス（と発音せり）を病み、汚れたる浴衣一枚を身につけ、猫三匹、自炊自飯、仏壇に「隣人」の小肖をまつれり、小さきローソクに灯なきはあはれふかし、背戸に立ち、葵の花水々しくのびたり、徳島弁にて語る、白髯の好老爺、世間の何事も知らず、寔に画中の人物也、モラエスの宅を辞して、二人瀧のヤキモチを食ひに行く。

当日の日記全文であるが、同行した「中川キクマロ君」⁷については「文豪モラエス」の方に詳しく書かれている。貴司は徳島に帰省していた折りに同郷の彼と親しくなったのだが、東京・上野の美術学校の画学生であり、新聞で紹介されたモラエスに会いたがっていた。訪問した際、モラエスの顔を描いている所も作中に出てくる。一方、貴司の方は当時大阪で生活しており、鳴門の実家に度々帰省していたが、『東京日日新聞』を日常的に読むことは難しかっただろう。「中川キクマロ君」からモラエスの紹介記事を見せてもらったと考えられるが、貴司自身何故モラエスに会おうとしたのか。当時どういう境遇にあったのかも関係するだけに、次節で貴司の経歴について整理しておく。

3、貴司山治という作家とモラエス訪問の経緯

貴司山治、本名・伊藤好市は、明治 32 (1899) 年 12 月 22 日徳島県板野郡鳴門村大字高島（現在の鳴門市鳴門町高島）で生まれた。父親は一労働者から金貸し業の商人、さらに塩田の地主にまでなったが、貴司の「わが遍歴」⁸によれば、小学生の時「本を読むことも禁じられて朝夕家業の労働」に従事させられ、何でもむさぼり読む中で「十三歳の時、小説家になる決心をしてそれを人にかくしていた」という。『大阪時事新報』の懸賞小説に応募した「紫の袍」が選外佳作（三等）になったのをきっかけに、20 歳の頃大阪へ出て同社の記者になるが、大正 13 (1924) 年に退職、翌年『東京時事新報』の懸賞小説に応募した「新恋愛行」（原題「故郷」）が入選し貴司山治という筆名を用いた。大正 11 (1922) 年から大正 14 (1925) 年まで、大阪割烹学校機関誌『婦人之世紀』の編集にも携わり、「めがねさん」「伊藤生」「伊藤好」などの変名で多くの記事、小説などを発表した。大正 15 (1926) 年 5 月に上京し、その翌年に大阪朝日新聞社の懸賞映画小説にも入選して（「霊の審判」本名・伊藤好市で発表）、大衆文学の新人として活躍するようになる。

その一方で貴司は、評議会に出入りして原稿料の一部を労働運動のために寄付しており、昭和初年代、プロレタリア文学に作家活動の中心を置くようになる。もっとも、中川成美

「文学者・貴司山治とプロレタリア文学」で述べているとおり、「プロレタリア文学の枠のなかでのみ論じることは不可能」であり、「一般に貴司の文学的業績として評価されてきたのは、知識階級によって先導された日本プロレタリア文学運動のなかにあつて、通俗小説、大衆小説と揶揄されたポピュラー・カルチャーの方法を果敢にプロレタリア文学に導入、反映させた手腕」にある⁹。特に昭和3（1928）年8月から翌年にかけて『東京毎夕新聞』に連載された『ゴー・ストップ』（原題「生まれ・進め ― ゴウ、ストップ ―」）¹⁰は大きな反響を呼んだ。この小説は硝子工場の争議を描いたものだが、貴司は「郷里の鳴門で、評議会指導の大ストライキたる塩田争議をつぶさに見聞していた」¹¹し、登場人物のモデルは昭和2（1927）年の塩田争議に関わった人達である。昭和4（1929）年に日本プロレタリア作家同盟（略称ナルプ）に加入し、翌年その中央委員になるが、プロレタリア大衆文学を提唱した点で、貴司は他のプロレタリア作家とは異なる独自の立場を取っていた。『ゴー・ストップ』も「労働大衆の読み物」を書く仕事を文学者の一つの任務」と考えて執筆したものである¹²。だが、文学大衆化をめぐる問題において、作家同盟の評論家、蔵原惟人らによって『ゴー・ストップ』における小説内容の卑俗化が批判され、貴司自身「労働大衆の娯楽読み物」から階級「闘争に役立つ小説」を考えるようになっていく¹³。

貴司は昭和7（1932）年に治安維持法違反容疑で検挙され、昭和12（1937）年の検挙では一年間拘留となり、完全に転向する。出獄後は実録文学、時代小説の方向をとったが、思想的煩悶は続き¹⁴、文筆活動を絶って京都府船井郡胡麻郷村（現・南丹市）に疎開。農村で開墾に従事する中敗戦を迎える。戦後京都府農地委員となり、全日本開拓者連盟農民組合を結成して中央常任委員になるが、昭和23（1948）年に帰京。文筆生活に戻り、『徳島新聞』連載の長編『写楽太平記』（昭和33（1958）年11月21日～翌年11月18日夕刊）など各地の新聞に大衆向けの小説を多く発表した。『婦人之世紀』をはじめ雑誌の編集にも多く携わってきた貴司は、徳島県から作家を志す人達のために『暖流』を創刊し（昭和36（1961）年10月）、「暖流の会」代表としての活動は昭和48（1973）年（11月20日没）まで続いた。

晩年は徳島の作家のために助力したが、若い頃の貴司は都会志向であつたから、「自然的なる一切のものより、より更に文化的なるものに進化する努力が現代人の生活」で、「文明的な凡ての要素は都会の中」（「田園から都会へ」、『婦人之世紀』第16年9号、大正14（1925）年12月）¹⁵にあると考えていた。モラエスを訪問したのは大阪から東京へ生活の場を移す一年前だが、貴司が徳島に隠棲していたモラエスを訪ねたのは何故か。当時の境遇を見ていくのに大阪の新聞社を辞めた頃まで話を戻さねばならないが、貴司は大正13（1924）年10月20日の日記に「新聞記者生活を、絶望の中から展開せしむる方法として、かねての小説家にならうと志し」、「東京時事の懸賞小説を書いてみる気になつた」と記している¹⁶。11月に大阪時事新報社に退職届を出し、翌年1月、応募した懸賞小説について東京時事新報社から入選の連絡が届いていたものの、身の定まらぬ境遇にあつた。それ故、「文豪モラエス」でも、モラエスに会った際「自分の身分を説明する言葉にちよつと困つた」と書かれている¹⁷。新聞記者を辞めて職業作家を目指していた時であつたし、モラエスに会いに行つ

たのも、故郷に住むヨーロッパの〈文豪〉に対する憧れからと考えられる。

だが、貴司が『東京日日新聞』の記事を見てイメージしていた〈文豪〉モラエスは、実際の人物像とはかなり異なっていた。「文豪モラエス」では、次のように書かれている。

私はモラエスといふ名のひびきからスペインの文豪イバネスの風貌を連想した。(略)モラエスさんはイバネスのやうな偉い文学者なのかも知れない。そしてよほど気むづがりのピュリタンで、才能も、名誉も、欲望も世間的な一切のものをなげすめて徳島のやうなところへきてかくれて世を終らうとしてゐるのかも知れない、と思つた。私の気持は恐怖をさへ感じた。勿論故郷へ帰つたら是非一度訪ねてみようと思つたのである。(「文豪モラエス」¹⁸⁾)

「イバネス」とはスペインの小説家、ビセンテ・ブラスコ・イバニェス(1867年1月29日～1928年1月28日)のことである。彼は大正12(1923)年12月23日に来日し、スペインの世界的文豪という触れ込みで、新聞でも話題になっていた¹⁹⁾。イバニェスとモラエスを重ねて捉えていたのは、二人とも日本に来たヨーロッパの〈文豪〉としてジャーナリズム上で話題となり、世界的文豪に対する憧れがあったからだろう。だが、「よほど気むづがりのピュリタン」と市民革命の運動家のようにモラエスを捉えていたのは、実際の人物像とかけ離れている。イバニェスは反王制の革命運動家で本国スペインからフランスに亡命した作家である。徳島に隠れ住むモラエスにも政治的理由があったのではと貴司は思ったのだろうが、〈文豪〉と称された以外にイバニェスと共通する所はない。モラエスに関する情報が少なかつただけに、イバニェスと似たイメージで捉えて「故郷へ帰つたら是非一度訪ねてみようと思つた」のである。

貴司は実際の人物像とかけ離れたイメージを抱いていただけに、モラエスに会った際、その風貌や生活ぶりを見て呆然となる。その訪問の様子が「文豪モラエス」で書かれているのだが、この作品には小説的脚色、創作された部分もある。そこで、本作品において貴司はどのようにモラエスを捉えていたのか、虚構部分も併せて見ていく。

4、「文豪モラエス」における小説的脚色

「文豪モラエス」の初出稿「モラエスさん」は、大正14(1925)年12月、『婦人之世紀』に「めがねさん」という筆名で発表し(「世の中の話」の中の一つ)、昭和5(1930)年に改造社刊行の『暴露読本』に収録する際、「附記」を加筆して改題した。当時貴司は、評論「大衆文学としての暴露小説」で、「プロレタリア大衆文学」の方法として「資本主義社会は、資本主義的な嘘を以て武装されて」おり、その「現代の闇黒面」を暴く「暴露小説の制作」を提唱していた²⁰⁾。単行本『暴露小説』のタイトルもその主張に由来する。

「文豪モラエス」は「附記」のくだり以外、初出稿「モラエスさん」と同じ内容である。モラエスの家を訪れた時の見聞が書かれており、実体験に基づくものの、小説的脚色、虚構も加えられている。貴司は、モラエスの貧相な身なりや「文豪」らしからぬ様を見て呆気にとられるのだが、「ジャーナリズムの英雄」的な人物像とは異なるその印象を次のよう

に記している。

全く、「ポルトガルの文豪」にしては余りに物が判らず、何んにも知らないのだから、きけばきくほど風のやうに、きいてあるこちらが馬鹿のやうな気がしてくるのだから。たゞしモラエスさんの人の好いことは文豪以上である。私は「文豪モラエス」といふジャーナリズムの英雄の中から名も誇もないささやかな人物を発見した。「文豪」はよごれた浴衣を着て畳の上に座つてゐる。

(略)

浴衣をきて、ロイマチスをやんで、日本の若い女との同棲に老いたる生活の末を過ごし、もぬけのからのやうに、なにもなく、ほんとうになんにもなく、こんな^{いな}邊部に棲んでひとり、生の終りを待つてゐる……あなた何てお名前でしたつけ。あゝモラエスさん。／お清^{せい}さんが死んでもう十何年になるといふ。十年の日日夜夜、供養を怠らない老いたる恋慕者のあやしい痴情を、私はすゝけはてた小さなその仏壇の中に見た。／(何のために、あなたはこんな所でくらしてゐるのです。あなたがポルトガル文豪ですか。あなたが——)／私はさうした一切の追求をやめて、少女のやうな桃色の頬をしたモラエスさんの顔をしげぐとみた。モラエスさんが何であつたか、もうよく判つた気がした。(引用者注、／は改行を表す、以下同様 「文豪モラエス」²¹⁾)

作中には日記に記されていたやうな、モラエスとのやりとりや飼われていた猫のことも出てくるが、恋慕の相手が「お清さん」になっている点は注意すべきだろう。徳島移住後のモラエスは、ヨネの姪・斉藤コハルと同棲したが、病で彼女にも先立たれて孤独な晩年をおくっていた。前述した『東京日日新聞』の紹介記事にも、「お米は後に彼が若き日本の女の生活を述べし「小春とお米」なる著にその情と、心づくしを世に掲げてゐる」と記されていたし、その記事を目にしていた貴司が「お米」や「小春」のことを知らない筈はない。恋慕の相手を「お清」という名の一女性にしたのは意図的な創作、虚構であり、二人の女性(お米、小春)を「日本の若い女」の「お清」に集約し、象徴させる形で物語化している。



貴司は、作中でモラエスを、亡き「友達」(貴司の日記では「隣人」と記されていた)の供養をしながらひとり生の終りを待っている、「名も誇もないささやかな人物」として捉えている。想像していた人物像と全く異なるが、「文豪以上」の人の好い—老人としてモラエスを好意的に捉えている。「モラエスさんが何であつたか、もうよく判つた気がした」とあるが、カリスマ性や威厳など微塵もなく、むしろ貧しくささやかな生活の中で隠棲している〈市井の人〉をモラエスに見出している。評論家の久野収は「『日本精神』解説—モラエスの価値について—」で、「モラエスが終始無名の庶民として、庶民を妻とし、地方の都会でその生涯を送つた」ことから、「日本の伝統を論じる場合にも、民衆や民話や俗謡

の世に注目」していたことを評価している²²。貴司の場合、モラエスに関する情報も少なく、その著作を読んでいないが、モラエスに直に会って庶民の生活に溶け込んだその姿を目の当たりした。そうした一庶民、名も誇りもない好人物としてモラエスを捉えている眼差しは、大衆小説を志向しその後プロレタリア大衆文学を提唱するようになる貴司の文学の方向性とも繋がっている。

「文豪モラエス」における虚構、特に小説的脚色が目立つのは『暴露読本』収録時に加筆された二つの「附記」である。モラエス没後の話として加筆されたのだが、「一九三〇年春」の「附記」では、モラエスが自殺し、その足下に「モラエスシンダラ、カラダハハイニシテ、カゼノフクトキトバシテクレ」という「ロマンチックな文学的な遺書」がおちていたと書かれている²³。新聞から得た情報とされており、実際『東京朝日新聞』昭和4(1929)年7月2日朝刊の記事を見ると「滞日三十年の領事自殺す 遺書を柱に張つて 亡き愛妾との人情物語り」という見出しで、「モラエス死んだら焼いてくれ」と片仮名で書かれた紙片が自宅の柱に張りつけられていたことが報じられていた。しかし、実際の遺書に書かれていた文言は「ワタクシハ モシモ シニマシタラ ワタクシノカラダヲ トクシマデヤイテクダサレ、トクシマ大正二ネン七月二十九日 モラエス」であり²⁴、作中のような内容「ハイニシテ、カゼノフクトキトバシテクレ」は貴司による「ロマンチックな文学的」空想である。さらに、二つ目の「一九三〇年夏」の「附記」にその後日談も書かれており、徳島へ帰った際「町の古い老人」から、モラエスは足が不自由であったため踏み外したのか、土間へ落ちて死んでいたのであり、遺書などないという話を聞き「狐につまゝれたやうな気に」なる。作品末尾で「盆踊りで有名な徳島といふ町には古い狐か狸かゞ住んでゐるらしい。」「何と文学的な狐又は狸であることよ」という感想を記し、狐か狸に化かされたやうな不思議な話にしている²⁵。民話的オチをつけている点も小説的脚色である。

貴司がこのような虚構を加えたのは何故か。情報が少ない分、想像や空想を膨らませる余地もあったのだが、前述したように『暴露読本』刊行時、貴司はプロレタリア大衆文学を提唱し、プロレタリアートの諸問題も大衆小説の形式、通俗性を取り入れ平易な表現を用いて描くべきだと考えていた。「文豪モラエス」はプロレタリア文学ではないが、モラエスを市井の庶民として捉え、民話的オチをつけていたのも大衆に寄り添った文学を志向した貴司のスタンスを反映している。しかも、『暴露読本』にはプロレタリア文学の部類に入る「裁判と盆踊り」も収録されている。徳島の盆踊りを題材としており、モラエスの影響から書かれた小説と考えられる。そこでこの作品についても触れておく必要がある。

5、「裁判と盆踊り」とモラエスの影響

短編小説「裁判と盆踊り」は「サンデー毎日」第9巻27号(昭和5(1930)年6月)に発表し、単行本『同志愛』(先進社、昭和5(1930)年6月)と『暴露読本』(前出)に収録された。小説の舞台は徳島市であり、「左翼労働組合本部」からオルグとして派遣された徳永安吉が小作争議を指導して暴力行為取締法で捕まり、その公判がうら盆と重なって盆踊

りの行事が賑やかに催される中、法廷での審理がなされる話である。裁判と徳島の盆踊りを結びつけること自体奇抜な取り合わせだが、「文豪モラエス」の作中では徳島の「盆踊りのこと書きました」とモラエスが語る所があり²⁶、前述したように「一九三〇年夏」の「附記」でも「盆踊りで有名な徳島」と書かれている。花野富蔵の翻訳などまだ出ていない時期だが、モラエスから徳島の盆踊りの著作に関して話を聞いており、そのことに触発されて貴司は盆踊りを題材とする小説を書いたと考えられる。「裁判と盆踊り」の冒頭は、「阿波の盆踊りは藩主家政入国の時——何とかしてどうかしてといふ由来を説くまでもなく日本的に有名である」という一文から始まるが²⁷、「日本的に有名」と書いたのはモラエスのことが念頭にあったに違いない。

本作品の特徴は、労働争議に関わる裁判の場面を描きながら阿波踊りにおける庶民のエネルギーが捉えられている点にある。被告の安吉は、法廷の裁判長に対して暴力行為取締法（大正 15（1926）年施行、暴力行為等処罰ニ関スル法律）は小作争議や労働運動の取締りに利用しないと議会通過の際に言っていた筈とその矛盾を述べ、「法廷は神聖だ」と裁判長に訴える。裁判長はその言葉を逆手にとり安吉の発言を遮ろうとするが、問答の最中、町にくり出していた盆踊りの一隊が裁判所の隣にある県庁官舎の奥庭にやってきて、三味線の音や囃子言葉が聞こえてくる。その場面は次のようにユーモラスに描かれている。

「法廷は神聖なのである。よく心得てゐる筈ぢや!」／裁判長の顔は青白く神経質にひきしまつてゐた。

とろん!／とろん! とん、とん!／ああありや、／おどるきちがひ／みるあほう／
うちにゐるのは病ひ持ち!／う う う うわ、うわ、うわ!／ベンコシヤン／
ベンコシヤン

（略）その声の方へ、あつけにとられながら今自分が二年の懲役に処せられる危い瞬間であることも忘れ、裁判長との問答を中止して耳を傾けた。／裁判長も、いかめしい表情をしたまゝ、ひよいと自分も盆踊りの声の方へ意識をとられた。その瞬間、被告と裁判長との間に「神聖な法廷」が姿をかくした。／次の瞬間、我れに返つた二人は壇上と、壇下とで視線を合はした。安吉がクスリと笑つた。裁判長もクスリとなりかけて、急に苦虫をかみつぶしたやうなむづかしい顔になると、又法冠を手でなほして、唐草模様の下のネクタイをいぢつて、叫んだ。／「被告……被告は……」

（「裁判と盆踊り」²⁸）

「ベンコシヤン」という三味線の音は「町の中央にある花柳街をくり出したベンコシヤン隊」によるもので、彼らは「知事閣下に恭順の意をいたし」、商売繁栄のご最良にと「ご機嫌とり示威運動をやる」²⁹。その珍妙な掛け声に気をとられて、安吉とともに裁判官も笑いそうになる。外から流れ込む唄声は、さらに傍聴席を笑わせ、判決を下そうとする裁判長の声をけしてしまい、「えらいやつちや／えらいやつちや」とコミカルな囃子言葉と三味線の「ベンコシヤン」という音が続く所で作品は終わっている³⁰。「ベンコシヤン隊」は知事のご機嫌とりでくり出してきたのだが、小作争議の関与者を裁く法廷で、裁判長の声か

彼らの唄声のためにかき消されてしまうあたり、あたかもデモ隊による「示威運動」のように機能しており、含みのある終わり方になっている。

元来徳島の盆踊りは、金沢治『日本の民俗 徳島』によれば「キチガイオドリとかイケソラとかいわれて街頭を狂うがごとく姿態をくねらせて踊る行進踊り」であり、「徳島城下町だけに発達した狂い踊りであって」、「活動的であり、デカダンであったため封建制下庶民の鬱結をはらすはげばとなり極端に流れたので舞台の歌舞の方は厳禁されたが、行進踊りだけが広がっていった」という³¹。作中では、まさしく「きちがひ」踊りとして描かれ、熱狂的な庶民の三味線や唄によって「神聖」とされる法廷も茶化し風刺している。労働運動の関与者を暴力行為取締法で裁こうとする体制側の計略を暴きつつ、盆踊りの風習に見られる庶民の熱気と躍動感が描き出されている。プロレタリア大衆文学を提唱し、大衆に読まれる小説を試みていた貴司であったからこそ、花柳街の芸妓らの「ベンコシヤン隊」を描いたのだが、徳島の盆踊りに着目したこと自体モラエスの影響によるものである。そういう点では、「裁判と盆踊り」は「文豪モラエス」の延長線上に書かれた作品であり、『同志愛』だけでなく『暴露読本』にも収録されたのは、モラエスとの関わりを意識してのことであろう。

その後、貴司はモラエスに関わる作品を書いていない。だが、晩年、『暖流』創刊号（昭和36（1961）年10月）の「徳島の作家紹介」において、モラエスを題材とする作品を発表していた佃実夫³²（「暖流の会」同人）にエールを送る形で、貴司は「モラエスさんを訪ねてその時の感想を雑誌に発表したことがあるが、その後昭和になって花野富蔵君などによって紹介されたモラエスさんは、どうみても納得できずモラエスのために残念だった」と書いている³³。さらに、佃田に助言して、おヨネの「枯骨を追って辺土の徳島へきてそこに一生を埋めるまでの妖しい情痴（？）の秘密が小説的フィクションによって、十分にあばき出さるべきである。そうすることによってモラエスの一生涯がそもそも何であったかがしのばれる」と述べており³⁴、かつて「恋慕者のあやしい痴情」（「文豪モラエス」前出）をモラエスに見ていたのと通じている。領事の職をすてて徳島に隠棲したモラエスに、貴司は愛する者への情の深さと寂寥を見ていた。それ故、花野富蔵の『モラエスの日本精神』（日本放送文化協会、昭和16（1941）年12月）のように、「心魂を傾け尽し苦難の実践を通して日本精神を体得した」³⁵という見方、日本精神の体得者としてモラエスが顕彰されたことに違和感を抱いていたのだろう。モラエスに対する記憶や思いは、30年以上経ても貴司の文学活動の中に底流していたと見られる。

このように、貴司におけるモラエスの影響を考察するにあたり、モラエスを訪ねた経緯とともに「文豪モラエス」「裁判と盆踊り」の二作品をもとにその受容のありようを検証してきた。貴司は、恋慕者への情の深さゆえ徳島に隠棲した市井の人としてモラエスを捉えていた。貴司のモラエスへの関心は、プロレタリア文学の方向をとっても、その枠の中に収まりきらぬ大衆性の志向と接続しており、インテリゲンチヤの文学より大衆の読み物として小説を書くことに繋がっていた。モラエスに関わる作品の発表がプロレタリア大衆文

学の可能性を説いていた時期と重なるのもその証左である。モラエスの影響が見られる作品は一時期のもの、直接には二作品とはいえ、他の日本の文学者や文化人が注目するようになる時期より早いものであったし、晩年、徳島の文学者を助力する活動にも底流していた。貴司においてモラエスとの出会いは、文学活動のありようを考える際、とりわけ郷土との関わりにおいて一つの足がかりを与えてくれたものだったのだろう。

【参考I】日本の文学者における〈モラエスもの〉一覧 戦前：大正14年～昭和19年

※戦前の新聞（『東京日日新聞』『東京朝日新聞』『読売新聞』『徳島毎日新聞』）や日本近代文学関係の目録及び個人全集の索引、徳島県立文学書道館「文学企画展文学者の見たモラエス」（令和元（2019）年11月）等からモラエスに言及した文学者の作品（ジャーナリスト、一般人のものは除く）を調査して発表年順に整理した。題名から見当をつけて確認できた作品をリストアップしたので、網羅したものとはいえないが、今後調査を進める中で補足し、戦後の作品とあわせて別の機会に提示したい。

大正14（1925）年

めがねさん（貴司山治 ※伊藤好市の変名）「モラエスさん」（『婦人之世紀』大正14年12月）

昭和5（1930）年

貴司山治「文豪モラエス」（『新鋭文学叢書 暴露読本』改造社、昭和5年11月）

*初出稿「モラエスさん」の内容に「附記」を加筆したもの

昭和7（1932）年

西崎満洲郎「文豪モラエス翁を訪ねて」（佐藤信重・麻生恒太郎編『新興詩・随筆選集』

詩と人生社、昭和7年1月）*生田花世（小説家・詩人）の実弟、夭逝した徳島の詩人

昭和10（1935）年（モラエス七回忌）

新居格「モラエスの七回忌に際して」（『徳島毎日新聞』昭和10年5月14日）

新居格「モラエス忌の国際的意義」（『徳島毎日新聞』昭和10年6月3日）

新居格「再び徳島に寄せる—国際観光の角度—」（『徳島毎日新聞』昭和10年7月1日）

佐藤春夫「徳島見聞記」（『東京朝日新聞』昭和10年7月1日～5日）

佐藤春夫「モラエスの未刊詩」（『徳島毎日新聞』昭和10年7月1日）

正宗白鳥「モラエスと魯迅」（『読売新聞』夕刊、昭和10年7月20日）

佐藤春夫「文芸懇話会に就て = 広津和郎君に寄す =」（『東京日日新聞』昭和10年9月5日～8日）

佐藤春夫「日本文学雑感（そぞろごとを記して『徳島の盆踊』の訳者に寄す）」

（『時事新報』昭和10年9月30日～10月2日）

昭和 11 (1936) 年

佐藤春夫『熊野路』(小山書店、昭和 11 年 4 月)

菊池寛 「四国雑記」(『婦人公論』昭和 11 年 7 月) *この年に徳島来訪

佐藤春夫「山水おぼえ帳」(『文芸春秋』昭和 11 年 8 月)

昭和 12 (1937) 年

新居格「モラエスの遺書」(『東京朝日新聞』昭和 12 年 9 月 21 日～24 日)

*『野雀は語る』(青年書房、昭和 16 年 7 月) に収録

昭和 15 (1940) 年

新居格「モラエスの夜」(『街の哲学』青年書房、昭和 15 年 12 月)

昭和 16 (1941) 年

富士正晴 詩「墓地の春」(詩雑誌『三人』昭和 16 年 3 月)

*野間宏・富士正晴・井口浩『山繭』(明窓書房、昭和 23 年 1 月) に収録

昭和 17 (1942) 年

吉井勇「海南小記」(「モラエス」の章)(『相聞居随筆』甲鳥書林、昭和 17 年 5 月)

*昭和 11 年に徳島来訪

佐藤惣之助「徳島のモラエス」(『春すぎし』鶴書房、昭和 17 年 4 月)

昭和 18 (1943) 年

三田華子「旅人」(『文芸』昭和 18 年 1 月) *徳島出身の小説家

昭和 19 (1944) 年

吉井勇 「モラエス忌」(『玄冬』創元社、昭和 19 年 3 月) *短歌十首

【参考Ⅱ】『東京日日新聞』朝刊 大正 14 年 3 月 9 日記事

岡本良知「徳島に隠れ住む 文豪モラエス 日本娘の跡を慕ひ 栄職を抛つて十余年」

今を去る十四五年前、即ち明治の来つ方にポルトガル領事として神戸にありしウエンセスラウ・モラエス氏を知る人は少ないだらう。然し、文学者として、旅行家としてのモラエス氏が日本にありしことを、彼の本国人で知らないものは殆んどないのである。それ程彼の著はした書は本国人のみか数ある欧州人に愛せられ懐しまれたのである。それ程の名



と筆とを有せし氏は、今果して何処に生きてゐることであらうか。

氏の最初の著書の現れてより、読まれてより、既に三十年を経てゐるが、氏への新しき好奇と哀惜と期待とはいよぐ厚いものがある。彼こそはまことに不可思議な非凡な文学者である。そして亦あくまでその一生を懸けての真摯な日本嘆美者であり研究者である。

一八五四年、ポルトガルの首府リスボンに生れた彼は、十七歳にして海軍に入り、艦長の職に至るまで、普ねく諸方を旅したのである。神戸の領事に任ぜられたのもさうした旅の途すがら東洋を巡り日本を訪うた折のことであつた。一九一二年(明治四十五年)彼はこの領事の任を艦長の職と共に棄て去つたのである。

これよりさき、彼の領事邸に召使ひし、お米と呼ぶ可憐な少女があつた。或る日病を得彼女がその郷里徳島に帰臥するに及んでモラエス氏の日本への、日本人への嘆美は、総てを棄てゝその召使の郷国にかくれ住み、日本人の生活のただ中に入り込まうとしたのである。この彼が忘れ難い召使お米は後に彼が若き日本の女の生活を述べし「小春とお米」なる著にその情と、心づくしを世に掲げてゐる。モ氏は徳島に住みてより十年、今や全く世から、姿をかくし終へて日本の市井中に日本人さながらの生を送りながら、日本を書き、日本人の風俗を究め、自然を嘆美してゐるのである。この徳島よりあらはれる美しき温かき厳かな彼の声は、彼の本国人にいかにも、己が国の慕はしき文豪の姿を見得ぬ焦慮を感じしめてゐることだらう。いかに多くの正しき日本の理解を欧州人に強ひてゐることだらう。

私は嘗て海の外にありし日、日本を最もよく深く多く伝へし三人として、ラフカディオ・ハーンとマックス・ノルドウとウエンセスラウ・モラエスの名を、幾度か耳にした。前の二人は、既によく我等の間に知られてゐる。けれどモラエスの名は、恐らくこの私の小文で初めて見られる人が多いことだらうと思ふ。小泉八雲なき後、日本人の生活の奥に潜む情を、社会の流れの裏に行く物のあはれを、民や日本の伝統の魂を、自然の美の広き鑑賞を、かくも多くかくも深く示す人があつたであらうか。

また外人として日本人になりきつた永き年月の悲喜を、観察を、かくも述べる人があつたであらうか。彼は一方では、科学的に史的に冷き解剖と判断を、我等の国に加へながら、他方では、多感な情と同感とを以て我等と共に生きてくれる人なのである。

彼は、まことは、文明批評家とも呼ばるべき人であらう。深き鋭き筆を、或は美しき歎を歌ふために、或は、温かき印象を述ぶるために或ひは、広き史を編むためにもつてゐる。それ程彼は何とない心と形の書のみを物した人である。彼はロマンチストでもなく、イムプレシヨニストでもなく、リアリストでもなく、その他批評家の定めるいづれの標準にも当たらない文学者で、ただ真摯と多感の文学者であり、而も広く深き教養と博識から来る、洪みのある多感性の人である。

彼は常に人ともとの事とを話さずに考へる人である。故に屢々経済的事情、政治上の有り様を見る眼を伴ふことがある。然し又子供の如き、素朴と純粹とを秘めてゐる人でもある。さればこそ、古き日本の歌に美を探り得たのもであらう。『芸術家は模倣せざりき。事実を印象のまゝに見、楽しみ、然る後、種々な暗示を妄想し表現しぬ。同時に自然主義者たり

印象主義者たりて、己が幻を真実と結びぬ。かくも日本の文学はなされたるものなり。』と、「大日本」のうちに彼はいつてゐる。

終わりにモラエス氏の日本に関する著書を挙げて

一、Tracos do Sxtremo Oriente.(Recordacas da China e saudade do Japao.

(極東足跡へ 思ひ出の支那と懐しき日本)

二、Dai-Noppon.(大日本)

三、Cartas do Japao.(日本よりの手紙 三冊)

(イ) Aantes, durante e depois da Guerra Russo-Japonez.(日露戦争前、中後)

(ロ) Culto do Cha.(茶の湯)

(ハ) Paizagem da Chinae do Japao.(支那及び日本の自然)

四、Vida Japoneza.(日本の生活)

五、Bon-Odori em Tokushima.(徳島の盆踊り)

六、Ko-Haru e O-yone.(小春とお米)

七、Relance de historia do Japao.(日本歴史瞥見)

-
- ¹ 小説家の中河与一は「徳島のモラエス」(『自由』第7巻10号、自由社、昭和40(1965)年10月)で、大正12(1923)年に徳島在住のモラエスに会いに行ったことを書いているが、戦後に回想されたものであるから後付けされた部分もあろう。
- ² 拙論「昭和一〇年代における〈日本的なもの〉—横光利一の「厨房日記」から—」(『九大日文』第12号、平成20(2008)年10月)において、横光の小説「厨房日記」が書かれた背景として〈日本的なもの〉の議論が高まっていたことに着目し、同時代の知識人、文学者の言説をもとに昭和10年代の〈日本的なもの〉の問題機制について考察した。
- ³ 『暴露読本』前出、114頁。
- ⁴ 岡村多希子「戦前におけるモラエス顕彰」(『東京外国語大学論集』第42号、平成3(1991)年3月)に同記事のことが指摘されているが(185頁)、1923~24年の『東京日日新聞』を調べても記事を見つけないことが出来なかったとされる。佃実夫編集『モラエス案内』(徳島県立図書館、昭和30(1955)年7月)に同記事の一部が抜粋されていたが、掲載年月日など未詳だった。
- ⁵ 大正6(1917)年に東京外国語学校に着任したピントは「学生たちにモラエスの人と作品について語り、岡本の寄稿」につながった(岡村「戦前におけるモラエス顕彰」前出、185~186頁)。岡村論では、ピントの影響をうけた学生達(安部六郎、上野忠夫)が大正12(1923)年にモラエスの住居を訪問したことも言及している。ちなみに中河与一がモラエスの住居を訪問したのもその時期で、東京外国語学校でポルトガル語を学ぶ友人と一緒に訪ねたことが「徳島のモラエス」(前出)に書かれている。
- ⁶ 貴司山治研究会編『貴司山治全日記』DVD版(不二出版、平成23(2011)年1月)。
- ⁷ 暖流の会徳島事務所編『暖流』第1号(昭和36(1961)年2月)に掲載された貴司の「徳島の作家紹介」にも「中川規矩磨」と二人でモラエスを訪ねたと記されている。
- ⁸ 貴司「わが遍歴(未定稿)」(『日本プロレタリア長編小説集 第3 ゴー・ストップ』三一書房、昭和30(1955)年1月)231頁。貴司の経歴については「わが遍歴」の他、貴司山治 net 資料館(<http://ito-jun.readymade.jp>)内の「貴司山治略年譜」(伊藤純)と貴司山治の遺稿「私の文学史」(伊藤純・編注)、日本近代文学館・小田切進編『日本近代文学大事典』第二巻(講談社、昭和52(1977)年11月)の「貴司山治」(堀井謙一)の項

- 目、徳島県立文学書道館編・発行『貴司山治 ― 昭和という時代に生きた作家 ― 展』(平成 18 (2006) 年 12 月)等を参照した。
- 9 貴司山治研究会編『貴司山治研究』(不二出版、平成 23 (2011) 年 1 月) 9 頁、10 頁。
 - 10 『ゴー・ストップ』初刊本は、中央公論社から昭和 5 (1930) 年 4 月 1 日に発行されたが 4 日に発禁処分となり、その改訂版が 4 月 25 日に同出版社から刊行された。
 - 11 貴司「解説」『日本プロレタリア長編小説集 第 3 ゴー・ストップ』前出、223 頁。
 - 12 貴司「解説」前出、221 頁。
 - 13 貴司「解説」前出、230 頁。
 - 14 貴司「わが遍歴」(前出)では、一時「東亜共同体論」を可能性あるものと考えていたが、ミッドウェー沖の敗戦のことなど不利な戦局を聞き「自分の東亜共同体的認識や日本資本主義への認識が全く錯覚にすぎないことを知り」「すべての自信を失って軽井沢の山荘にこもり、懊悩煩悶」していたと述べている(234 頁、235 頁)。
 - 15 『婦人之世紀』前出、195 頁、196 頁。
 - 16 『貴司山路全日記』DVD 版、前出。同日の日記には、既に原稿の一部を送って新聞社から続きを書くよう通知があったものの、進んでいない状態であることも記されている。
 - 17 『暴露読本』前出、119 頁。
 - 18 『暴露読本』前出、115 頁。
 - 19 『東京朝日新聞』大正 12 (1923) 年 12 月 24 日の朝刊記事「まづ文豪の眼に富士の姿 愛嬌よいイバニエス氏 月並の語にも格別の詩趣」等、来日したイバニエスの様子が報じられていた。貴司は『婦人之世紀』第 14 年 13 号(大正 13 (1924) 年 2 月)に「めがねさん」の変名で「ブラスコ イバーニエスの小品『贅澤』の翻訳に就て」を発表している。
 - 20 『文学時代』第 2 卷 3 号(昭和 5 (1930) 年 3 月) 125 頁。
 - 21 『暴露読本』前出、122~123 頁、125 頁。なお、引用中の「<」は二倍送りの繰り返し記号を表す(元の本文は縦書き)。以下の本文引用についても同様。
 - 22 佃実夫編集『モラエス案内』前出、19 頁。
 - 23 『暴露読本』前出、126 頁。ちなみに「附記」の前の文章末尾に「(一九二四年)」と年代が加筆されているのは誤植で、正しくは初出稿の発表年である一九二五年である。
 - 24 新居格「モラエスの遺書 葡国で発見された新資料」(『東京朝日新聞』昭和 12 (1937) 年 9 月 21 日朝刊)、モラエスの遺書を「原文のまゝ」引用。
 - 25 『暴露読本』前出、127 頁~128 頁。
 - 26 『暴露読本』前出、122 頁。
 - 27 『暴露読本』前出、18 頁。
 - 28 『暴露読本』前出、24~25 頁。
 - 29 『暴露読本』前出、19~20 頁。
 - 30 『暴露読本』前出、25~26 頁。
 - 31 『日本の民俗 徳島』(第一法規出版、昭和 49 (1974) 年 8 月) 160 頁、166 頁。
 - 32 佃実夫(大正 14 (1925) 年 12 月 27 日~昭和 54 (1979) 年 3 月 9 日)は、昭和 33 (1958) 年に『四国文学』第 21 号に「ある異邦人の死」(芥川賞候補作)、翌年『宝石』12 月号に「毛唐の死」を発表。『暖流』に連載していた『わがモラエス伝』は昭和 41 (1966) 年 10 月に単行本を河出書房新社から刊行した(徳島県立文学書道館編・発行『没後 30 年「知の希求者・佃実夫の仕事」展』平成 22 (2010) 年 1 月 参照)。
 - 33 貴司「徳島の作家紹介」(『暖流』第 1 号、前出) 227 頁。
 - 34 貴司「徳島の作家紹介」前出、228 頁。
 - 35 花野富蔵『モラエスの日本精神』「序」前出、2 頁。同書は、昭和 16 (1941) 年 6 月 6、7 日にわたりラジオで放送された同題目の講演に基づくもの。